

史跡和歌山城第37次発掘調査 現地説明会資料

平成26年11月15日（土）午後1時30分～3時

和歌山市和歌山城整備企画課・文化振興課

(073-435-1044) (073-435-1194)

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

(073-426-1070)

和歌山市は、国の史跡である和歌山城の保存整備を行っています。平成18年度に御橋廊下^{おはしろうか}の復元整備が完了し、一般に公開しています。平成20年度からは御橋廊下に連なる周辺（二の丸西部）整備のための遺構確認調査を実施しています。二の丸は藩主が生活し、政治を行ったところで、西部は大奥と呼ばれるエリアに相当します。

これまでの発掘調査では、「和歌山二ノ丸大奥^{わかやまにのまるおおおくとうじおんゆうしのす}当時御有姿之図」（原図が文政8年（1825）の絵図、以下絵図と略称）にみえる徳川期の遺構として、大奥内部と周囲の通路部を区画する土塀基礎石組、石組溝・石組集水枡などの排水施設、漆喰^{しつくい}貼りの池、水琴窟^{すいきんくつ}、石組池（心字池）などの庭園施設を確認しました。さらに、徳川期以前の浅野期石垣（江戸時代初頭）の一部を確認しています。

本年度は、二の丸北西部に3ヵ所の調査地点を設けて実施しました。第1区は大奥の奥庭にあたるところで、庭園の景石や飛石の園路、穴蔵^{あなぐら}、茶室前の茶庭などが絵図に描かれています。また、第2区は大奥と中奥の境界部分ですが、絵図には廊下^{おじょうぐち}が描かれ「御錠口」と記されている場所です。第3区は昨年度に調査（第36次）を実施した中庭の北東にあたり、井戸と土塀（大奥と中奥の境界）が描かれています。これらの大奥の施設を確認する目的で調査を実施しました。

1. 発掘調査の概要

(1) 遺跡名：史跡和歌山城

(2) 所在地：和歌山市一番丁3番地内

(3) 調査主体：和歌山市 まちづくり局 まちおこし部 和歌山城整備企画課

調査指導：和歌山市教育委員会 生涯学習部 文化振興課

調査機関：公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター

(4) 調査期間：平成26年7月29日～ 継続中

(5) 調査面積：第1区：162㎡ 第2区：28㎡ 第3区：36㎡ 合計：226㎡

2. 調査の成果

発掘調査を実施した二の丸西部は、建物配置などを描いた絵図が残されており、遺構を推定しながら調査を進めることができました。そして、徳川期の穴蔵・水琴窟（第1区）、根石（第2区）、石組井戸・玉石敷・土塀基礎・礎石列（第3区）など絵図にみえる大奥御殿向の諸施設に対応する遺構を確認しました。

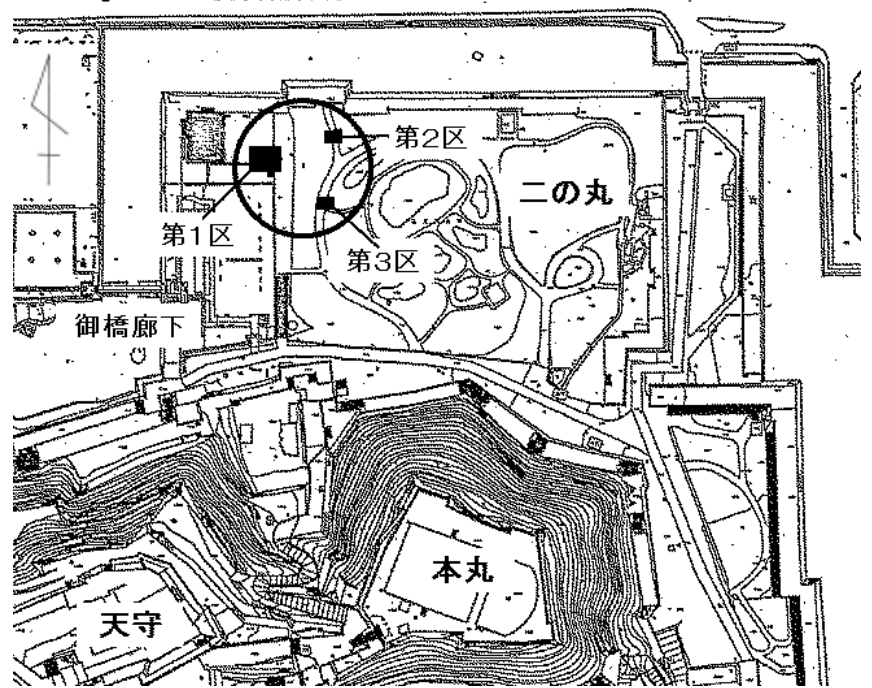
【検出遺構】

穴蔵 石組の地下室で、幅1.8m、長さ4.6m以上、深さ2.3mを測る規模の大きなもので、床面に緑色片岩の板石を敷き詰め、側壁は砂岩の切石を用いて構築しています。最上部の石材が2点残されており、漆喰を用いて修理した痕跡や天板を受ける部分の状況などがわかりました。

この遺構は、絵図にみえる「御数寄屋」前の垣根で囲まれた「茶庭」の外、奥庭の空闲地にある「穴蔵」に相当するものです。

穴蔵とは、地下部分の上を木製の板材などで覆って用いるもので、素掘りのままのものや全て木材で構築した例もあります。

穴蔵の用途は地下式の倉庫で、常時金銀を納めたり、火災などの非常時に家財を一時的に避難させたりと、その用い方は様々であったとされています。



史跡和歌山城第37次調査位置図

水琴窟 直径約50cmの穴に堺焼播鉢を逆の位置に埋設したもので、上部が失われた状態で見つかりました。これは水琴窟と呼ばれる遺構とみられ、庭に作られる小規模な排水施設です。実用の排水施設として始まりましたが、陶器内部に落ちる水滴の反響音を鑑賞する施設にも発展したことから「水琴窟」と呼ばれています。水琴窟は手水鉢ちょうずばちの手前に作られることから、絵図にみえる「御数寄屋」前の垣根で囲まれた「茶庭」内部に手水鉢が描かれており、これとセットとなる施設であると考えられます。

石組井戸 内径90cm、深さ7.0mを測る石組の井戸を検出しました。コンクリート製の板石で蓋をして埋め戻されていたため井戸内部は江戸時代の旧状を良好に保っており、現在においても水が湧きだし井戸として機能しています。井戸の地表面は、砂岩の石材を板状に加工して並べ、一辺2.6mの正方形の範囲を石貼りとした精美なものです。石貼りの一部には漆喰で補修した痕跡もありました。内部の石組みは、上から1.8mの範囲が砂岩切石を密に積んでおり、この範囲は下に行くほど口径が広がっています。その下は上部と様相が異なり、内径は約1.2m均一で、砂岩の自然石を主に積んでおり、緑色片岩のものも少量用いています。このように上下で石材や形状が異なる江戸時代の井戸は珍しいといえますが、その原因としては古い段階（浅野期？）からあった井戸を、地面をかさ上げする時（浅野～徳川移行期・二の丸西堀埋立）に積み足した可能性が考えられます。

玉石敷 石組井戸の周囲は直径1～3cmの玉石を厚さ5～10cmに敷き詰めた玉石敷となっており、絵図に描かれた、灰色で着色された範囲とほぼ一致しています。

土塀基礎 石組井戸の東側で、玉石敷に接して土塀基礎を検出しました。土塀基礎は、南北方向に幅約1.5m、深さ約30cmの溝を掘削し、そこに粘土質の土を充填したもので、東側の一部に砂岩石材を埋め込み補強を行っています。この土塀基礎は、絵図に大奥と中奥の境界として描かれている土塀の下部構造に相当するものです。

礎石列 土塀基礎のすぐ東側に、土塀に並行する礎石列を検出しました。礎石列は、直径30～60cm、厚さ15～20cmを測る礎石が4基、南北方向に配置されるもので、絵図に中奥の廊下として描かれているラインに一致しています。

3. まとめ

今回の発掘調査では、和歌山城二の丸西部の大奥御殿向の諸施設に対応する徳川期の遺構を確認することができました。特に、石組井戸と穴蔵は石造の大規模なものであることが判明し、絵図・文書からは知ることのできない地下構造が明らかになりました。また、絵図に大奥と中奥の境界として描かれていた土塀を遺構（土塀基礎）として検出したことで、大奥と中奥の境界を初めて明確にできたといえます。

これらの発掘調査成果は、今後の史跡整備を進める上で貴重な資料となります。



穴蔵（石組の地下室）



穴蔵の内部



石組井戸・玉石敷・土塀基礎・礎石列



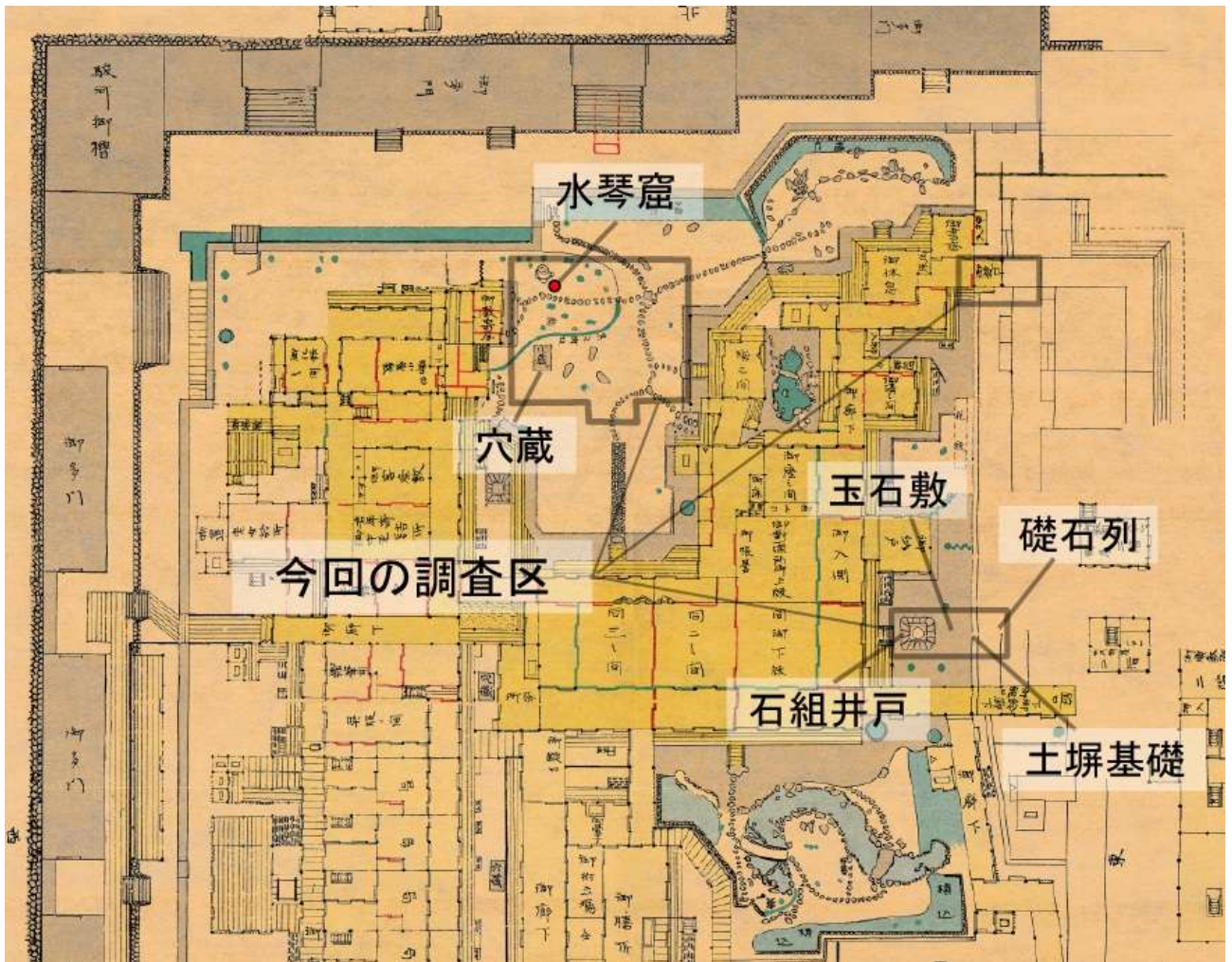
土塀基礎(大奥と中奥の境界)



石組井戸



石組井戸の内部



わかやまにのまるおおおくとうじおんゆうしのず

史跡和歌山城第37次調査（「和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図」に加筆作成）